

氏名	金丸友理絵																								
学位の種類	博士（音楽）																								
学位記番号	博音第15号																								
学位授与年月日	令和4年3月25日																								
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者																								
題目	アルトゥール・シュナーベル校訂 ベートーヴェンのピアノソナタ全集の指使いについての一考察																								
学位論文等 審査委員	<table border="0"> <tr> <td>(演奏審査)</td> <td>主査教授</td> <td>熊谷恵美子</td> </tr> <tr> <td></td> <td>副査教授</td> <td>北住 淳</td> </tr> <tr> <td></td> <td>副査教授</td> <td>中巻 寛子</td> </tr> <tr> <td></td> <td>副査教授</td> <td>井上さつき</td> </tr> <tr> <td>(論文審査 及び最終 試験)</td> <td>主査教授</td> <td>熊谷恵美子</td> </tr> <tr> <td></td> <td>副査教授</td> <td>井上さつき</td> </tr> <tr> <td></td> <td>副査教授</td> <td>中巻 寛子</td> </tr> <tr> <td></td> <td>外部 審査員</td> <td>教授 平野 昭 (静岡文化芸術大学)</td> </tr> </table>	(演奏審査)	主査教授	熊谷恵美子		副査教授	北住 淳		副査教授	中巻 寛子		副査教授	井上さつき	(論文審査 及び最終 試験)	主査教授	熊谷恵美子		副査教授	井上さつき		副査教授	中巻 寛子		外部 審査員	教授 平野 昭 (静岡文化芸術大学)
(演奏審査)	主査教授	熊谷恵美子																							
	副査教授	北住 淳																							
	副査教授	中巻 寛子																							
	副査教授	井上さつき																							
(論文審査 及び最終 試験)	主査教授	熊谷恵美子																							
	副査教授	井上さつき																							
	副査教授	中巻 寛子																							
	外部 審査員	教授 平野 昭 (静岡文化芸術大学)																							
学位論文の要旨																									
<p>本研究は、アルトゥール・シュナーベル Artur Schnabel 1882 1951 が校訂したベートーヴェン Ludwig van Beethoven 1770 1827 のピアノソナタ全集（以下シュナーベル版に見られる特異な指使いを研究課題に取り上げ、指使いに込められたシュナーベルの意図、および指使いが生み出す音楽的表現の具体的な内容について検討することを目的としている。</p> <p>シュナーベルは20世紀を代表するベートーヴェン弾きと評される著名なピアニストである。彼の生涯を通しての音楽活動は多岐にわたっており、ピアニストとしてだけでなく、作曲家、教育者、そして楽譜校訂者としても重要な功績を残した。シュナーベル版は、当初1924年にドイツのウルシュタイン社から出版され、シュナーベルの名が世界中に広まるとともに普及していった。シュナーベル版には、強弱記号やテンポの指示を始め、非常に多くの書き込みが見られるが、その中でも彼の指使いは極めて特徴的であり、それは全32曲のソナタの細部にわたって指示されている。シュナーベル版の序文には、この特異な指使いについて、技術的な観点からだけでなく、音楽的表現を目的として選ばれているということが彼自身の言葉によって述べられている。楽譜の校訂方針について記載されている序文の中で、彼がまず指使いの特異性について言及しているということからも、シュナーベル版の中で指使いがとりわけ重要な意味を持っているということが窺える。しかしながら、その特異性ゆえに、シュナーベルの弟子を含む演奏者や研究者から、時おり不可解とすら言われることもあり、従来の研究ではその指使いに込められた音楽的な意図について深く追求しようとした試みはほとんど行われてこなかった。そこで筆者は、シュ</p>																									

ナーベル版の特異な指使いについて、彼自身の音楽理念や作品解釈に即して考察することの必要性を強く感じた。

本論は 2 章から構成される。第 1 章では、シュナーベルの生涯における音楽活動について、演奏、教育、作曲の観点から述べた。その中で彼がベートーヴェンの音楽とどのように関わってきたのかということについて言及した。また、シュナーベルが自身の音楽活動を通して、当時の音楽教育における問題、特に作品の音楽的内容と演奏技術が切り離されて教育される傾向があることについて強い問題意識を持っていたことについても触れた。

次に、ベートーヴェンの時代から現在に至るまでのベートーヴェンのピアノソナタ全集の出版の流れを概観し、それぞれの楽譜の特徴について述べるとともに、原典版と解釈版をめぐる諸問題について述べた。そして、シュナーベル版が出版された経緯や、楽譜の校訂作業の際に彼が参照したとされる資料や出版譜について調査した結果を述べた。シュナーベルは楽譜校訂に際して、個人としてはかなり大規模な資料調査を行い、一次資料をはじめ、シュナーベル版と同時代に出版された複数の解釈版に至るまで、多くの資料批判を重ねていたことが分かった。楽譜の校訂作業の過程を辿り、シュナーベル版が原典に忠実であることを指針とした解釈版であることを示したことで、ベートーヴェンのピアノソナタの楽譜の中で重要な位置を占めていることが分かった。しかしながら、彼自身によって様々な解釈が書き込まれている楽譜であることは事実であり、その中でも特に、彼が書き記した指使いの中には非常に特異なものが多く見受けられる。ベートーヴェンの意図に忠実であろうとしていたシュナーベルが生み出した特異特異な指使いには、彼が伝えようとしていたことが具体的な教示として表れているのではないかと思われた。そこで、シュナーベル版の指使いの特異性について考察するにあたり、第 1 章の最後で、本論においてシュナーベル版の比較対象とする楽譜を選出し、その根拠とともに示した。

第 2 章では、まずシュナーベル版の序文に記載されている内容から、楽譜の校訂方針や、彼の音楽の考え方について考察した。また、演奏者に作品の重要な要素に気付かせるために、あえて難しい指使いを選択したというシュナーベル自身の言説を引用し、シュナーベル版の特異な指使いが、音楽的表現を目的としながら、教育的な示唆を含んでいるものであることを示した。このことを踏まえ、指使いについての考察を深め考察を深めていく上で重要な手がかりとなる彼の音楽理念や、指使いを含む演奏技術に対する考えについて述べた。

次に、ベートーヴェンのテキストとシュナーベル版について、①指使いおよび②スラー表の 2 つの観点から比較・考察を行った。指使いについては、シュナーベルがベートーヴェンの指使いとはあえて別の指使いを記した、を記した、作品 2-2、作品 31-2、作品 53 に焦点を絞り、指使いに込められた音楽的な意図や、その指使いが生み出す演奏効果について考察した。その結果として、作曲家の記したテキストを正確に演奏できるように指使いが指示されていること、そしてベートーヴェンの意図を踏まえながらも、シュナーベル自身の解釈と独自のピアノリズムを融合させ、なおかつ作品の中の重要な要素について、奏者に認識を促すような指使いになっているということが見出された。

また、スラー表記についても比較・考察し、ベートーヴェンのスラーに対する加筆や変

更の多くが、小節線で区切られたスラーに対して、フレーズを表すスラーへと拡張されていることが確認された。それらのスラーは、旋律の方向性や音楽のまとまりを明確に示すものであり、さらにそれが実際の演奏表現に繋がるように、スラーに準じた指使いが記されていることを示した。指使いとスラーの両方の観点から比較・考察を行ったことにより、作品解釈と演奏の両面から、シュナーベルの指使いについての考えが浮き彫りになった。

それまでの結果を踏まえ、シュナーベル版の指使いの特異性について、第 1 章で選出し章で選出した 17 の楽譜と比較しながら考察を行った。その結果として、として、a) 運指によるレガート、b) スラーの切れ目を表す指使い、c) 下行形ノンレガートにおける第 4 指の連続使用、d) タイの音の指換え、e) リズムのアーティキュレーションを表す指使い f) デュナーミクに応じた指使いの選択の 6 つの特徴が見出された。これらの特異な指使いについて、それぞれシュナーベル自身の音楽的解釈に即して考察した。

シュナーベル版の指使いの中には、通常ではあまり考えられないような指や手の運び、時には音楽的内容を表現するために、伝統的な演奏習慣を排除しようとするような指使いを選択することもあった。他の版との比較を通して、彼の指使いが極めて特異であることが浮き彫りになった。しかし、彼の特異な指使いは、隠れた旋律の強調や、個々の旋律の個性を特徴づけるもの、和声進行における音色の変化、リズムの生き生きとした動きを表現するもの、また、音楽のまとまりや方向性を示すものなど、音楽のあらゆる表情を生み出すようなものであることが見出された。そこには、奏者側の演奏の都合を優先させるのではなく、指それぞれの特質を指それぞれの特質を利用し、音楽的脈絡に沿った指使い徹底的に追及していたシュナーベルの姿勢が表れている。

本論において、シュナーベルの音楽理念や作品解釈と関連付けて考察したことにより、彼の指使いが生み出す演奏効果や音楽的表現の具体的な内容を提示するとともに、指使いの特異性の意味についても筆者なりに解明できたと思う。シュナーベルは、演奏、教育、楽譜の在り方、また作品への取り組み方など、当時の音楽界における様々な側面に対して問題意識を持っていた。その中でも特に彼が強く主張していたのが、作曲家が書き記したテキストを正しく読み取ること、その背後に隠されている作曲家の本意を深く読み取ること、そしてそれを演奏表現に結びつける真のテクニックを身に着けることの重要性であった。ベートーヴェンが楽譜には記していない作品に内在する音楽的本質の部分を、様々な指示記号を用いて譜面上に可視化し、さらにそのような指示記号だけでは表しきれないような、演奏における最も複雑で精妙なものを具現化するための指使いを書き記した、ということがシュナーベル版における最も大きな功績功績であると言えるだろう。そして彼の指使いは、演奏者に身体的感覚を通して作品の中の重要な要素について「気付き」を与えるような、教育的な観点からも考えられた非常に意義深いものであることが分かった。

演奏 審 査 結 果 の 要 旨

J. S. Bach パルティータは和声感、リズム感など各舞曲の特徴を良くとらえ、表現できていた。ホ短調の緊張感も音質によく表れバッハの美しさを十分に味わえた。1つ欲を言えば当時の楽器（チェンバロ）での奏法、音色などの考察が演奏にもっと反映されると、より本質的な理解が深まるのではないかと感じる。

L. v. Beethoven の Sonate Op. 31-2 は、楽譜をよく理解し自分の音楽として演奏していた。

研究テーマであるシュナーベルの楽譜を正しく理解するだけの力を感じさせるものであった。ただ、やや呼吸が浅く、表現過多の部分があり、自然な美しさを今後の演奏においては追求してほしい。

A. Schnabel の7つの小品は、ドイツの伝統的な音楽、和声感、その和声の進行の美しさを感じさせる説得力のある演奏だった。金丸本人がアーメルト・シェーンベルクに影響された、と曲目解説に書いているが、その内容を十分に納得できる響きの美しさであった。無調ではあるが色彩感豊かな音色から金丸自身のシュナーベルへの想いが伝わってきた。ラストにベートーヴェンの最後のピアノソナタ Op. 111 を演奏した。作曲家にとってもピアノソナタ最後の名曲で、その輝き、内的な想いを金丸は彼女なりの表現と演奏技術をもって楽しませてくれた。決して華やかな曲ではないが、当初の作風としては斬新、かつ伝統的なドイツ音楽の素晴らしさを秘めた名曲を内的な美しさ、和声感の緊張感を誇示することなく自然に表現されてたことは名演奏であったと感じる。

ピアニストには2通りのタイプがあり、1つは感性が研ぎ澄まされていて、自身の感情に添って忠実に演奏していく演奏家。もうひとつのタイプは学術的にも見識を深め、作曲家の意図していることから演奏を探っていく演奏家。世界で活躍しているピアニストをみても両方のタイプが存在している。金丸はその後者のタイプで、この研究によって自身の演奏も本格的に変わってきており、表現力も聴衆を納得させるものとなっていた。博士後期課程の学位審査として相応しい演奏会であったと思う。

論文審査結果の要旨

金丸による「アルトゥール・シュナーベル校訂ベートーヴェンのピアノソナタ全集の指使いについての一考察」は、いわゆる楽譜エディション研究に新しい視座を見出したものであり、学位論文として高く評価したい。名ピアニストとして、とりわけベートーヴェン作品の解釈（演奏表現）において世界的に名声を博したシュナーベルが、実は自ら校訂したエディションの楽譜とは大きく異なる表現をしていることは周知の事実である。しかし、「シュナーベル校訂版」の序文にはシュナーベル自身の言葉で「奇異な指使い」と認めたとうえで「校訂者は音楽的な正当性によるものだけでなく、校訂者自身の最善の判断と感覚及び音楽的な好みに応じて、省略、拡張、補足などの変更をしなければならない責任があると感じていた」（金丸訳）とあり、このエディションが実用版（kritische Ausgabe に対する意味での praktische Ausgabe）として演奏に供されるものではなく、むしろ、シュナーベルによるベートーヴェン・ピアノ・ソナタ研究としての性格、特質を金丸はみごとに浮かびあげている。「シュナーベル校訂ベートーヴェン・ピアノ・ソナタ全集」は、シュナーベルの作品解釈の研究表現そのものとしての新しい価値を金丸論文は見出している。不可解で特異、場合によっては演奏不能な「指使い」に注目した観点それ自体に、従来の資料批判を中心としてオーセンティックな楽譜を追求するエディション研究とは全く別の新しい研究分野の可能性までしめたことは高く評価されよう。（平野 昭）

金丸友理絵氏の学位論文『アルトゥール・シュナーベル校訂ベートーヴェンのピアノソナタ全集の指使いについての一考察』は、20世紀を代表するピアニストの一人、シュナーベルが校訂を行ったベートーヴェンのピアノソナタ全集の特異な指使いに着目し、その音

楽的な意図について掘り下げた研究である。全体は2章からなり、第1章ではシュナーベルの生涯を概観した後に、ベートーヴェンのピアノソナタの出版史を概観し、シュナーベル版がどのような位置づけにあるのかを検討している。第2章では、特異な指使いが見られる箇所を具体的に検討し、そこからシュナーベルの意図を探っている。その際、指使いと密接な関係にあるスラーについても考察している。分析の結果、著者はシュナーベルの運指の6つの特徴を抽出し、その特異な指使いが、彼独自の演奏語法やベートーヴェン解釈を凝縮したものであり、演奏家にとって貴重で有益であると結論づけた。

本論文は、これまで等閑視されてきたシュナーベル版の指使いに着目し、ピアニストならではの経験を生かして、その意図の解明を目指したユニークな研究である。ただし、論文には、さらに論点を整理し、階層立てて論じるべき部分も見られる。特に、スラーに関しての記述の部分は、は「指使いとスラーの両方の観点」ではなく、あくまでも指使いを主にして論じるべきであろう。とはいえ、論文の独創性は十分に認められる。

以上のことから、本論文を博士の学位に値すると判断する。(井上さつき)

金丸友里恵さんの学位申請論文は、20世紀を代表するピアニストであったアルトゥール・シュナーベルの校訂によるベートーヴェンのソナタ全集に付された特異な指使いに注目し、そこに込められた校訂者の意図と音楽を解明しようとしたものである。

自身もまたピアニストである金丸さんが、自らの専門に直結するテーマを選択し、シュナーベル版のテキストについて、演奏家としての経験と感性を十二分に生かしながら緻密な考察を行い、その指使いが示唆している音楽について説得力のある自説を提示していること、これは彼女の論文の卓越した点であり、もっとも評価されるべき点である。この論文はまさに演奏家が論文を書くことの意義を示した好例のひとつと言えよう。口頭試問における各審査員からの質問への応答も、この論文の背景にある彼女の研究の深さを証明する非常に適格なものであった。

このように、内容的には非常に優れたものと評価できる論文ではあるが、その一方で、惜しむべき点としては、その文章自体にまだまだ改善の余地があったのではないかとと思われることが挙げられる。すなわち、論述の順番についての整理が不十分であったり、言葉の選び方に慎重さを欠いているのではないかとと思われる点が多々見受けられた。これによって、この論考を読み進めにくい(難渋する)ということがしばしばあったし、せっかくの卓見が他の文章の中に埋没してしまっていて、その印象を弱めていると思われる箇所も複数あったように思われる。

また、結論における「彼[シュナーベル]の中にベートーヴェンから口頭伝承的に引き継ぐ音楽性が脈々と流れているのではないかとと思われる」(本論74頁)という推測は、口頭試問での「その口頭伝承の部分が参照した楽譜に見出せたのか」という質問に対しても、「見出せなかった」との回答であった。とすれば、これを結論で持ち出したことはあまりにも軽率であり、この論文にとってはむしろ瑕疵でしかないだろう。修正の際に削除することを勧めたいと思う。(中巻寛子)

金丸友理恵氏の学位論文「アルトゥール・シュナーベル校訂のベートーヴェンのピアノソ

「ナタ全集の指使いについて」は 20 世紀を代表するピアニストの 1 人でありベートーヴェン研究者であるアルトゥール・シュナーベルの校訂によるベートーヴェンのピアノソナタ全集における指使いに着目し、校訂者の意図と音楽解釈について考察した論文である。演奏家である自らの経験とピアニストとしての視点からの研究は大変興味深いものであった。

シュナーベル校訂版の序文にシュナーベル自身の言葉が記載されており、そこから導いた教育者としての一面もこの論文では「内容と演奏におけるものの矛盾と目的」を導いている。

本論文では特に指使いに特化して、その特異な方法について解明しているが、そこに関係するスラーとの関わりなど今後の研究においては追求してほしい点である。

しかしながら演奏家、教育者、学習者にとっても、新しい視点でのこの研究は役立ついく内容で高く評価したい。（熊谷恵美子）

最 終 試 験 結 果 の 要 旨

金丸の学位論文はピアニストであったシュナーベルの校訂による楽譜、特に指使いに注目して音楽的意図について解明しようとしたものである。自身も演奏家であり、その感性和経験を生かし緻密な考察を行って、独自の視点から音楽的意図を導き出した説得力のある論文である。演奏審査と合わせて考えても、金丸にとってこの論文の意義を十分に示すことができた優れた内容と言えよう。口頭試問における各審査員からの質問への応答も適格で、彼女の研究の深さや幅広さを示していた。文章、論述の運びに若干の改善すべき点があるとの指摘もあったが論文の独創性は十分に認められる。内容的には優れていると評価できる。

以上の事から本論文を博士の学位を授与するに値すると判断する。